

小学校社会科における視聴覚教材を活用した授業の構想と展開

—小学校第6学年「平和で豊かな暮らしを目指して」の場合—

小川 雄大*・木内 桂吾*・仁田 誠二*
伊藤 秀紀*・千葉 晃平*・黒田 紀子*・高橋 翔汰*
大西 翔太*・吉原 美悠*・森 早苗*
井上 奈穂**・青葉 暢子**・麻生 多聞**・原田 昌博**

(キーワード：社会科，視聴覚教材，高度経済成長，歴史)

I. はじめに

「社会科・地理歴史科・公民科の改善の基本方針（中央教育審議会，2008）」では、「社会的事象に関する基礎的・基本的な知識，概念や技能を確実に習得させ，それらを活用する力や課題を探究する力を育成するために，各学年段階の特質に応じて，習得すべき知識，概念の明確化を図る」ことが示されている。また，この「改善の具体的事項」においては，「作業的，体験的な学習や問題解決的な学習」の一層の充実による「学習や生活の基盤となる知識・技能」の習得が示されている。筆者らは，これまで，小学校における概念の習得・活用を行う授業を開発・実践（井上ほか2012，2013，2014，2015，益井ほか2016）し，習得・活用すべき概念の具体を提案してきた¹⁾。本研究では，先行実践の成果を踏まえつつ，これまで扱っていない歴史的分野を取り上げ，より児童自身の今の生活の歴史的背景についての理解を助ける教材開発を目指した。

平成27年度の「教育実践フィールド研究」では，以上の課題を踏まえ，鳴門教育大学附属小学校にご協力頂き，「小学校社会科における視聴覚教材を活用した授業の構想と展開」をテーマとした授業開発・実践を同校の6年で行った。（井上 奈穂）

II. 本単元で扱う教材

(1) 学習指導要領上の位置づけ

本単元では，学習指導要領第6学年において，「戦後わが国が，日本国憲法の成立や高度経済成長によるオリンピックの開催，冷蔵庫，洗濯機，白黒テレビといったいわゆる三種の神器の普及により，我が国が民主的な国家として出発し，国民生活が向上し国際社会の中で重要な役割を果たしてきたことがわかること」を目標として設

定した。その中で，日本国憲法の成立，オリンピックの開催など戦後の歩みを通じ，国民の不断の努力によって生活が向上し国際社会の中で重要な役割を果たしてきたことを理解できるようにする。また，平和で民主的な国家の一員として戦後の日本の課題や発展について考えていくことにする。（高橋 翔太）

(2) 教材観

本時は2時間構成であるが，前半部では終戦から約20年を経た日本が高度経済成長期を迎えたこと，および国の設計図となる新憲法の制定を通し，日本が自由で民主的な国家として再建し国際社会にも復帰したことで，人々の暮らしがどう変わったのか，東京オリンピックを題材に学習する。後半部では同時代の徳島に視線を移し，高度経済成長の恩恵が日本全土に及んだのではないこと，経済成長の暗部として公害問題が発生したことを，徳島の公害問題から学習し，前後半あわせて戦後日本の復興を，光と影，および都会と地方の両面から理解するのが狙いである。

前半部には，後半部で高度経済成長期の陰の部分の扱う前段階として，1960年代の光の部分の印象付ける役割がある。そのため，東京オリンピックを題材として，家電やインフラなどに牽引された高度経済成長期の日本の躍進ぶりや，ピクトグラムなど国際社会を意識した取り組み，戦争からの決別と平和の実現を体現する聖火ランナーなど，象徴的な要素を写真資料や映像資料で視覚的，感覚的に理解し，1945年以前と以後との変化を読み取ることで，経済成長が日本を豊かで自由な国にしたこと，それを可能にしたのが日本国憲法であることを理解するのが目的である。

後半部ではこれを前提に，児童にも身近な徳島の公害問題を通し，基本的人権の保障された1960年代の日本が，がむしゃらな発展を目指す段階から，現代に繋がる

*鳴門教育大学大学院社会系コース（院生）

**鳴門教育大学人文・社会系教育部

持続可能な発展を目指す段階へと移行しはじめたことを示していく。そのため徳島の経済成長に貢献した企業側の社員と、経済的な潤いと引き換えに公害問題を抱え込んだ行政の長、経済発展の恩恵より多くの不利益を被った漁協側の職員や住民といった具体的な人物を設定し、彼らの主張を児童みずから裁定する段階を挟んだのち、実際に問題がどう解決されたのかを学ぶことで、1960年代が基本的人権の軽んじられた戦前とも、発展のみに注力した戦後とも異なる、維持の観点を含んだ新時代の入り口であることを学ぶ。(森 早苗)

Ⅲ. 小単元「平和で豊かな暮らしを目指して」

(1) 単元の概要

本単元では、第二次世界大戦後の日本がどのようにして復興を遂げたのか、それによって発生した問題は何かについて理解させることを目標とする。現代の日本では、戦後の経済成長における急激な発展によって豊かな生活が送れるようになった。その要因として、高度経済成長や三種の神器の開発が挙げられる。この2点によって、戦後の焼け野原から復興を遂げたのである。また、復興のシンボルとして1964年に東京オリンピックが開催された。これらにより日本は急激な発展を遂げたが、弊害として工場の排水による公害の問題が発生したのである。1時間目では戦後の良い部分として、高度経済成長の様子について劇や当時の写真を提示することで社会や人々の生活の移り変わりについて学習させた。また、坂井義則さんが聖火ランナーを務めた理由について考えさせる

ことで、東京オリンピックが戦後復興のシンボルになり、日本の復興を世界にアピールすることができたことを学習させた。2時間目では、高度経済成長の弊害について北島であった異臭魚問題を題材として取りあげた。また、漁協と工場のどちらの立場を大切するべきかを討論させることで、持続可能な開発を行うためには何を大切にすべきなのかについて考えさせた。(伊藤 秀紀)

(2) 単元の構想

○単元名 「平和で豊かな暮らしを目指して」(全2時間)

○日 時 平成27年12月9日/14日

○対 象 鳴門教育大学附属小学校6年2組

○単元目標

- ・日本国憲法の制定と高度経済成長による社会の変化について興味を持つことができる。(関心・意欲・態度)
- ・持続可能な開発について自分なりの考えをもつことができる。(思考・判断・表現)
- ・経済成長のメリット・デメリットを身近に感じさせるとともに、その具体的な影響について理解できる。(知識・理解)

○指導計画

・第1次

日本国憲法の制定と経済成長をもたらす社会の変化について様々な資料を通じて関心を持つことができる。(興味・関心・態度)

経済成長のメリットが存在することを理解し、身近な問題としてその具体的な影響について理解することができる。(知識・理解)

時間	児童の活動	教師の支援	評価
10分	1. 1960年代の日本の状況を把握させ、オリンピックの映像や家電の普及率のグラフを見せることで理解する。 <u>児童の意識</u> ・テレビのない暮らしが普通だった。 ・エアコンや冷蔵庫、洗濯機も無かった。	・オリンピックの開会式や家電の普及率のグラフを見せることで、日本の状況について気づきやすくさせる。	家電の普及率のグラフを見て日本の成長や、変化について気づくことができたか。
	<u>MQ. 人々の生活はどのように変わっていったのだろうか？</u>		
25分	2. 1945年と1960年代の生活を高度経済成長や日本国憲法を基にして比較をする。 <u>児童の意識</u> ・経済力＝高度経済成長(インフラ・三種の神器) ・戦争をしない国へ＝日本国憲法の制定	・1945年代の映像(劇)を児童に見せることによって1960年代の生活や戦後復興の様子を理解させるのを助ける。 ・また、日本国憲法や高度経済成長など変化したことに対して、映像をもとに理解させる。	資料に基づき1960年代の状況について理解することができているか。
10分	3. 1960年代がどのような時代だったのかをまとめる。 <u>児童の意識</u> ○戦後から復興し、国際社会へ復帰した ○人々の生活は豊かになった ○自由で民主的な国家になった	・児童が1960年代の様子を資料や映像を提示することで理解しやすくさせる。	

- ・ 本次の展開 (1 / 2)
 - ・ 第2次
 - ・ 経済成長にはデメリットが存在することを理解し、身近な問題としてその具体的な影響について理解することができる。(知識・理解)
 - ・ 持続可能な開発について自分なりの考えを持つことができる。(思考・判断・表現)
- ・ 本次の展開 (2 / 2)

時間	児童の活動	教師の支援	評価
	1. 前時の学習の復習 2. 徳島での高度経済成長の様子について考える <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">MQ. 徳島はどれだけ豊かになったのだろう。</div> <ミニ劇> ○工業の人;徳島【北島】には工場がたくさんあって豊かになった。 ○住民(工場);経済が豊かになった。 人口密度の増加,村から町になった(1920年の誘致の際に決定) ○漁業の人;工場ができたせいで,仕事がなくなった。 ○住民(漁業);魚がまづなくなった。臭くなった。水質,大気汚染が発生した。 3. 両者の言い分をもとに,「行政」の立場(選挙)から自分の意見を考えてみよう。 ○企業側が開発をやめるべきである。 ○住民側がある程度の開発を認める。 ○魚が捕れなくなることは大変だけれど,工場のお蔭で町は豊かになったから…。	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリンピックや人々の生活の変化などを事例として,経済成長がもたらしたものについて理解することができるようにする。 ・ 高度経済成長下での徳島の様子について確認することができるようにする。 ・ 北島町史からおこした漁業組合と工場の対立を紹介することにより,徳島県の経済発展と公害問題について知ることができるようにする。 ・ 公害問題についての具体的な資料を用いることにより,児童が問題を身近に考えることができるようにする。 ・ 選挙を設定することにより,児童が具体的な意思決定を行うことができるようにする。 	徳島県における経済成長について理解し,公害問題が発生したことについて知ることができたか。(知識・理解) 持続可能な開発について自分の意見をもつことができたか。(思考・判断・表現)

III. 授業実践の実際

1. 第1次

(1) 概要

はじめに,児童に東京オリンピックの開会式の映像(1分弱)を視聴させた。次に,1964年当時のオリンピックのポスターを見せながら,「1960年代の日本はどんな時代だったのだろう」という本時のめあてを提示した。トイレや非常口で見られる視覚記号(ピクトグラム)が日本でオリンピックを皮切りに広がったということ,東海道新幹線などの交通インフラがこの時代に整えられていったという事実を,写真資料を提示しながら確認していった。他にも,高度経済成長期の三種の神器の一つである,白黒テレビの普及率のグラフを提示することで,日本がこの時代に豊かになっていったことを理解させた。さらに,視点を変え,東京オリンピックから約20年前は,日本は戦争をしていて,東京や広島は焼け野原だったことを確認させた。ワークシートに,「東京オリンピックの聖火ランナーを務めた坂井義則さんを当時の人々はどんな思いで見えていたか」という問いで考えさせ,意見を発表させた。日本は,戦後何も無いところから高度経

済成長により,復興を成し遂げ,もう戦争をしない平和な国になることを,広島で生まれた坂井さんがそのシンボルであったことを理解させた。それから児童に再現ビデオ(6分程度)を見てもらった。3人の登場人物を中心に,1960年代の日本はどんな時代だったかを児童に発表してもらった。児童の発言を踏まえ,この時代に詳しい千葉博士(大学院生)を登場させ,児童の発表を分かりやすく解説した。最後にワークシートに「1960年代の日本はどんな時代だったか」を一言で表現させた。その後,グループでの話し合いを通して,1つのキャッチフレーズを決定させ,画用紙に書くよう指示し,全体で共有した。最後に,1960年代の徳島はどうだったのかという問いを投げかけ,次時につなげた。(仁田 誠二)



(2) 教材上の工夫

① 映像教材

視聴覚教材では、授業の前半で取り上げた戦後の日本の様子や高度経済成長による人々の生活の変化を、再現ドラマを通してどのような時代であったのかを児童が考察できるような構成とした。具体的には①1945年、第二次世界大戦が終戦し、日本の復興を意気込む主人公の従兄弟（北原敏男）やその家族（北原良太）、②時が流れ

1964年、成長した良太が国鉄東京幹線工事に勤めインフラの整備に取り組む傍ら、自身を取り巻く生活環境の変化や日本国憲法のもと生まれた新しい権利の誕生、③新幹線・首都高速道路の開通とオリンピックの開催を通して、日本がもはや戦後ではなく、新しい時代の幕開けを感じさせる物語となっている。これを通して児童に「1960年代がどんな時代だったのだろうか?」と問いかけた。

○映像資料の概要²⁾

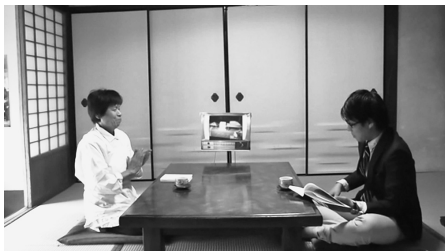
【戦争が終わり復興への歩みが始まる】

1945年、第二次世界大戦が終わり、戦後の焼け野原となった日本を再び復興させようと動き出す。「東京で復員兵の求人がありまして、いろいろ作って焼け野原の復興をしていってまいります」後に敏男は首都高速道路の完成に関わる。この時、良太も従兄弟の敏男のように日本の復興に貢献したいと密かに思いを募らせる。



(北原敏男【従兄弟】)

【時代の変化、生活の変化、そして、権利の変化】



(北原良太【主人公】)

高校を卒業後、上京した良太は国鉄東京幹線工事に勤め、1964年に開催される東京オリンピックに向けて計画が進められている東海道新幹線建設のために日夜働いた。仕事は順調に進み、家庭は裕福になり、様々な家電製品も買えるほどになった。また、日本国憲法のもと男女は平等となり、良太も妻の紀子と恋愛結婚を果たした。

【もう戦争じゃない。日本は復興したのだ】

1964年10月1日、良太はついに東海道新幹線を開通させた。オリンピックの始まる9日前であった。無事オリンピックも開催することができた。日本にはもう戦後の焼け野原の面影はなく、新しい時代にむかって走り出そうとしている。

敏男：

昔、男は国民服、女はもんぺ、髪型だって自由じゃなかった。それが今では何でも自由な時代になったな。どんどん新しくなっていく。時代も街も。日本も発展したな。

良太：

そうだね。でも日本はこれからもどんどん発展していくと思うのだ。



(木内 桂吾)

② 人物教材

まず、博士の役割について述べていく。ここでいう博士とは、「戦後～高度経済成長期に詳しい人物」である。この博士の役割は2点ある。

1つは、DVDの内容や内容に対応する知識についてまとめること。2つ目は、憲法や高度経済成長の点から解説をし、内容に説得力を持たせることである。授業においては、DVD鑑賞後の8～10分を博士の登場する時間とした。



次に準備段階について述べる。準備段階においては、「DVDを観て内容に関連する権利や知識を探す→模擬授業を行い、児童の発言を想定する→細案の作成」というサイクルで準備を行った。また、発言が出てこなかった場合も想定し、博士から働きかけるというパターンも考えていった。

最後に実際の授業での反省点について2点述べる。1つは、DVD鑑賞後に気づいたことをまとめる時間が少なかったこともあり、発言があまり出てこなかったことである。結果的に、博士が働きかけて内容を教授するような場面が目立った。2つ目は、DVDに出てくる用語が難解であり、児童が意味を取り違えていたという場面があったことである。例えば、「復員兵」という言葉は、小学生には難解であり、「戦地から戻ってきた軍人」という本来の意味ではなく、「また戦地へ向かう軍人」という誤った意味で捉えている児童もいた。以上のことから授業の時間配分、小学生の発達段階を考慮した用語の検討という課題が浮き彫りになった。(千葉 晃平)

2. 第2次

(1) 指導の流れ

第2次では、児童に高度経済成長とはどんな時代であったかを復習してもらうため、前時で児童がグループ

でまとめた画用紙(「～な時代」)を提示した。その後、「高度経済成長のころ、みんなが住んでいる徳島はどう変わっていったのかな」と問題提起をし、日本全体から徳島へと視点を転換させ、終戦直後の徳島と高度経済成長の最中の徳島を比較することで、徳島の復興の様子を確認させた。次に、高度経済成長期に徳島の北島町に工場を建てた東亜合成に注目し、東亜合成と共に豊かになっていく北島の様子を視聴覚教材で視聴させた。視聴覚教材を通して、東亜合成のお蔭で豊かになった一方で、工場からの排水によって、異臭魚などの公害が発生したことも理解させた。その上で、「北島を豊かにしてくれたけど、問題も起こしてしまった工場をどうすればいいのか?」と投げかけ、判断を求めた。この際、ビデオに出演していた工場長役の学生(経済の発展を重視する)と漁協の代表者役の学生(自然環境の豊かさを重視する)を教室に登場させ、両者の立場からのプレゼンテーションを行わせ、判断のための情報の整理を行った。判断の後、公害の問題に対する実際の北島町の対応(漁協に対する3億5,000万円の賠償金、工場の一時的な操業停止)を示し、「『発展』を大切にする工場と、『自然』にする漁協、どちらの意見が大切だと思うか」と問いかけた。最後に、どちらの考え方も重要であることを児童につかませて授業は終了した。(小川 雄大)

【北島の問題について考えよう】



【工場の主張】

- 農業の町→工業の町
- 200人→1,500人の従業員
- 工場周辺に人が集まった



【漁協の主張】

- 異臭魚の問題
- 魚が売れなくなる
- 北島町の公害をなくす町民の会



(2) 教材上の工夫

映像教材や寸劇を作成するにあたって、いくつか留意する点があった。以下にそれを列挙する。

- ① 今切川における公害の事実を具体的かつ簡潔に伝える内容であること
- ② 工場と漁協の主張をそれぞれ織り込むこと
- ③ 児童に問題意識を抱かせる内容であること

まず「①今切川における公害の事実を具体的かつ簡潔に伝える内容であること」についてだが、公害の事実を書面以外で伝えることに苦心した。公害についての客観的な事実を記載した書面資料を配布することも検討した

が、これでは児童に具体的な問題としての公害問題が伝わらないという弊害があった。公害があったという事実を認識することができても、当事者から見た公害問題と

【町長による問題提起】



いう視点が習得しにくいのである。そこで、登場人物のセリフに公害問題の事実を織り交ぜ、それぞれの視点から公害問題を考えることのできるように配慮した。これによって公害問題に対して主体的な意見を持つための足掛かりを作ることができた。

「②工場と漁協の主張をそれぞれ織り込むこと」は2つの主張を映像と寸劇で表すことによって達成した。映像での主張と、寸劇での主張を繰り返すことによって児童はより具体的に、両者の立場を理解することができ、自らの意見を考えることができた。

「③児童に問題意識を抱かせるような内容であること」の項目は今切川の公害が解決するにせよ、しないにせよ、様々な人々の生活に影響を及ぼし得る問題であるということ映像と寸劇で伝えることによって達成した。解決しなければ漁協側が、解決するために工場を停止すれば工場側が、それぞれ生活を脅かされるということを主に寸劇を使って児童に伝えたのである。

また視覚的効果として、全編白黒の映像にし、ノイズを組み込むことで1960年代当時の雰囲気を出すことにも留意した。当事者として意見を持ちやすいように、と考えたためである。また、字幕を付与することで内容理解のし易さについても工夫を行なった。(大西 翔太)



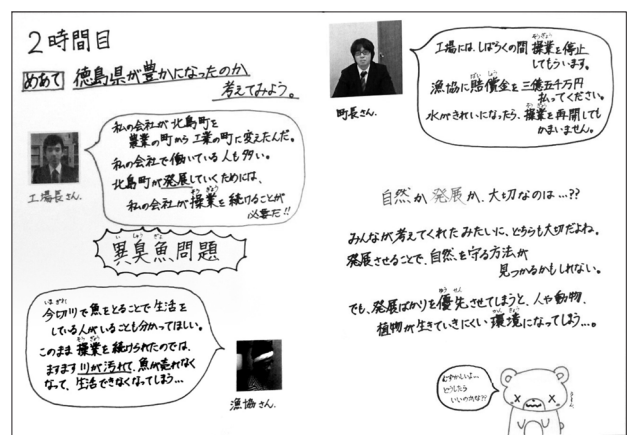
IV. 授業実践の評価

1. 学習者への振り返り

以上の授業展開を踏まえ、本授業の振り返りとして2時間の要点をまとめた小冊子を作成することとした。

小冊子の構成としては全6ページで、1・2ページに1時間目の要点、3・4ページに2時間目の要点、5ページに2時間の授業を通じて児童に考えて欲しかったことをメッセージの形で掲載し、6ページに児童への感謝のメッセージを記した。各時間の要点として重視したのは、発問内容とその発問に応じるために必要となる映像資料中の登場人物の発言内容の2点である。本授業における実践者として、最も大切にしたいことは児童に考える機会を提供することである。そのため、上記の2点を要点とし、小冊子の構成を行った。また、児童が親しみやすい冊子となるように、掲載の文章は全て手書きによるものとし、配色やイラストは鮮やかで、手に取りやすい柔ら

かい雰囲気となるようにも留意した。(吉原 美悠)



2. 授業者による振り返り

第1次では焦土と化した戦後の日本が、1960年代に東京オリンピックを契機として高度経済成長期を迎え、奇跡と呼ばれる復興を遂げた様子を、画像および院生有志の協力を得て作成した再現映像を通じて知らせることで、児童の関心を喚起し、具体的に理解させることを目標とした。1つ目の中心発問で東京オリンピック開催当時の日本人の意識、2つ目の発問では戦前と戦後の日本の違いについてそれぞれ考えさせた。そして最後に、1960年代がどんな時代であったのか「○○○○の時代」とネーミングさせることで、各児童にこの時代の特徴を考えさせた。まとめとして、多様な意見の中から授業者チームで検討した代表例を取り上げて授業を締めくくり、次時につなげた。

これを受けて、第2次ではテーマを「徳島県が豊かになったのか考えてみよう。」とし、徳島における高度経済成長期の様子をまず予想させた。次にそれに伴う負の面について、地元北島町で実際に存在した公害問題を取上げ、自らの問題として考え判断させることを目標とした。自主制作した映像と寸劇を通して事実と経過をふまえた上で、では児童自身が北島町のような事例に直面した場合、「発展か自然か」のどちらを目指すか、意見を求めた。

この設問に対し、6年1組の児童は大変意欲的に、地元
に誘致された企業の公害問題を、自身の身近な課題とし
て真摯に考え、自らの意見をワークシートに記し、意欲
的に発表する姿勢を示した。ただ時間不足のため、発表
や意見交換の機会が十分確保できなかったのが、授業者
をはじめ各メンバーも心残りであった。しかしこの授業
を通じて、各児童の心に確実に問題意識を喚起し得たと
の手ごたえを感じるものである。(黒田 紀子)

V. おわりに

習得すべき概念の習得・活用を目的とした授業開発の
一環として、今回の研究では、小学校の歴史的分野を対
象とした授業開発を行った。ここで取り上げたのは、
1947年に制定された日本国憲法下で示された「基本的人
権」である。「基本的人権」の概念が経済発展や生活の変
化の中で具体化されていく過程を理解することを通して、
その習得・活用をねらいとした。

本研究の成果は以下の2点に集約される。

1つは、児童にとって身近な地域の事例を取り上げた
点である。地域であった実際の問題を取り上げたことに
より、公害による「発展」や「被害」が児童自身の生活
に直結していることを実感させることができたといえる。

2つは、映像教材の開発である。取り上げる過去の事
例について考えさせるための知識を効率よく把握させる
ために、学生自身の演出・出演による教材を開発した。
これにより、把握すべき論点を明確化したことにより、
より深く「基本的人権」についての考察を深めることが
できたといえる。

一方、課題としては、教授したい概念・知識を意識す
るあまり、児童自身が解釈する余地が少なかった点であ
り、その意味で、十分な活用までは至らなかった。習得
から活用へどのようにつなげるかが今後の課題であるとい
える。

以上の成果、課題を踏まえ、今後も小学校社会科で行
う概念学習の授業開発・実践を行っていききたい。

(井上 奈穂)

◎謝辞

本授業の開発・実践にあたり、鳴門教育大学附属小学
校の佐藤章浩先生には大変お世話になりました。また、
映像教材の作成に当たり、鳴門教育大学大学院の佐藤凌
太さん、赤松信弘さん、安井知樹さん、田村仁八さんには、
映像教材への出演及び資料提供などさまざまな面で
ご協力いただきました。ありがとうございました。





◎追記

本稿の内容は筆者一同の共同作業の成果であるが、本

稿に記した報告の最終的な文責は井上にある。

(井上 奈穂)

付録1 ワークシート

① 平和で豊かな暮らしを目指して	6年 組 氏名	
めあて【 _____ 】		
問1. 坂井さんが聖火ランナーをすることを当時の人々はどんな思いで見ているだろう。 		
問2. 映像を見て、それぞれの場面でわかったことを書いてみよう。   		
_____	_____	_____
_____	_____	_____
問3. 1960年代がどんな時代だったか、一言で表現してみよう！ <div style="text-align: right; border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">時代</div>		
理由	_____	

注とめ みんなの意見を聞いて、1960年代の日本はどんな時代だったか書いてみよう。 _____ _____		

単元名	
6年 組 氏名	
めあて【 _____ 】	
問1 前時の学習をもとに、徳島での高度経済成長期の様子を予想してみよう。 _____ _____	
問2 自分の意見がどちらの主張に近いか、○を付けてみよう。 例 工場 ○ 漁協	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">工場</div> ←→ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">漁協</div>	
問3 町長はどうすればいいのか、あなたの意見を考えてみましょう。 _____ _____ _____	

脚 注

- 1) これまでに井上らは小学校における概念の習得・活用を行う授業の開発を行ってきた。
- 2) 執筆者らが協力し、脚本の作成、演出を行った。なお、登場人物はいずれも史料に基づき設定した架空の人物である。

引用・参考文献

- 井上奈穂ほか「小学校社会科における習得・活用型授業の構想と展開－単元「住民の政治参加」の場合－」鳴門教育大学授業実践研究, 第11号, 2012. 3, pp.59－65。
- 井上奈穂ほか「「情報化した社会」に関する概念の習得・活用を目指す授業の構想と開発－小学校5学年「くらしを支える情報」の実践－」鳴門教育大学授業実践研究, 第12号, 2013. 3, pp.75－84。
- 井上奈穂ほか「小学校社会科における体験型授業の構想と展開－小学校5学年「自動車産業について考えよう」の場合－」鳴門教育大学授業実践研究, 第13号, 2014. 3, pp.81－90。
- 井上奈穂ほか「小学校社会科における概念探究型授業の構想と展開－単元「これからの食料生産－どうする!? 回転ずし－」の場合－」鳴門教育大学授業実践研究, 第14号, 2015. 3, pp.79－86。
- 益井翔平ほか「概念の習得・活用を目指す小学校社会科授業－小学校第6学年「憲法とわたしたちの暮らし」の場合－」鳴門教育大学授業実践研究, 第15号, 2016. 3, pp.65－73。
- 中央教育審議会答申「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」, 2008年。
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf) (2017年2月3日確認)。
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社, 2008年。